

T-Bird

フランスの社会主義

1991年VOL.19 No.8



1991年8月号 100円

ボストモダン小説

ボジテイク・創刊号

M・レイナ、M・ハザ、W・オホルマンほか
越川秀明、柴田元幸、本村正雄、巽孝之ほか訳
底成の小説概念を解体したヒンチョンやベリス等の解
神を継承するアウアンギヤルドとホヅンや80、90年代
アメリカの斬新で過激な小説群の全貌を本邦初訳で徹
底的に大紹介！ 詳細な作家ガイド付。2000円

子ケル書

エドモン・ジャクスン 笠原節子訳
ユダヤ人として迫害の惨状、追放の辛酸、砂漠での流
動をくぐり抜けねばならなかった根源的体験から、
「ことごとく(食物)を喰ひ続けた現代フランスにおける
最もユダヤ的な詩人。思想家の主要関心の中心に
大詩人の第2期。サラとエリケルと呼ばれる一組の恋
人たちが通る愛と死の境。3000円

イギヨル I

ジャクスン 笠原節子訳
エドモン・ジャクスン「花柳燈籠」

東京都文京区小石川2-2-14 一乗ビル 郵便番号112
電話03-3818-8040 FAX03-3818-2437 目録星(〒72円要)1冊完売 白鳥書房 価格は税別

本居宣長と「自然」

山下久夫 3600円
本居宣長の思想の基本に「自然」(おのずからの観
念を認め、これを多面的に考察し、宣長研究に新
しい地平をひらいた気鋭の刺激的な力作である。
(相良亭)

イメージ・ウオッチング

赤田文哲 3500円
イメージ・ウオッチングとは自己を見つめること。
心とは自己ウオッチングによって生まれる自己イ
メージ。外果があまりにもめまぐるしいので、現
代人は自己を見つめることを忘れていないか？

脱出の技術としての批評

森常治 3600円
言語芸術としての文学は未知の宇宙空間を彷徨う
流浪の旅をよまなくされはじめた。この旅路のゆ
ぐえを案じる者ならば、著者の手の動きに注目し
ないわけにはゆくまい。

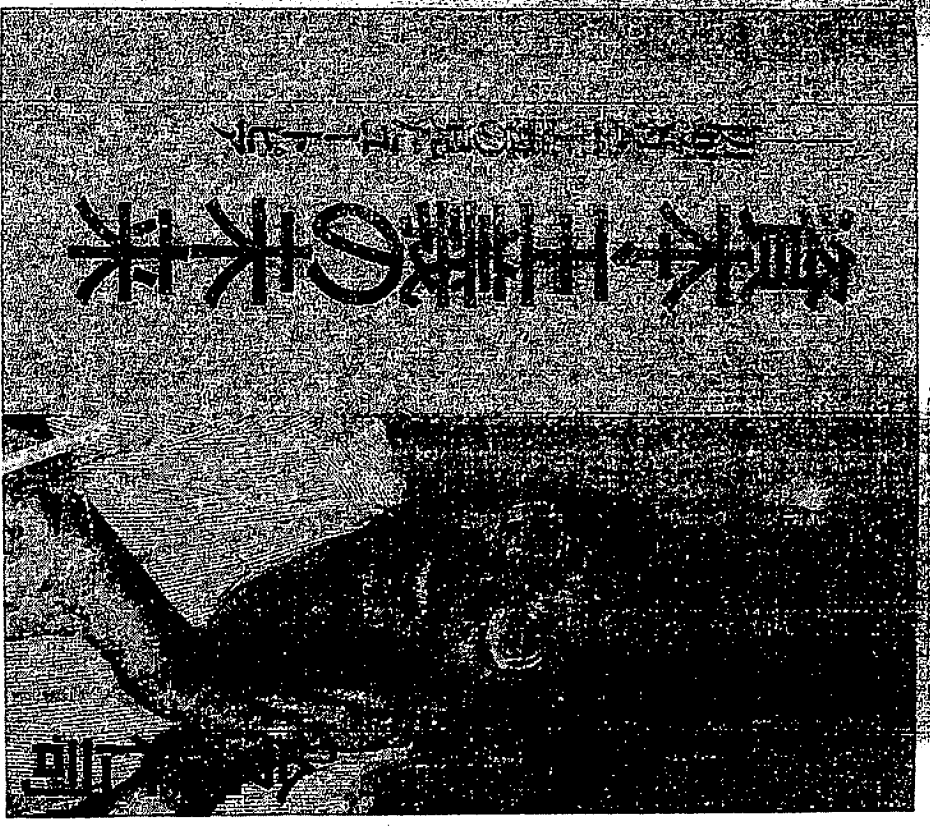
ヘルメスは自転車に乗って

堀切直人 2800円
「ヘルメス」を象徴する何世文明は、きらびや
か、華麗な装束を身にまとい、私たちに
何を語り、何を教えるのか、何を
何を語り、何を教えるのか、何を

沖積舎

〒100-0001 東京都千代田区千代田3-17-62
電話03-5561-3011 FAX03-5561-3012

評論集等の制作お引愛いたしております(居案内)



資本主義の未来

加藤哲郎の序文

加藤哲郎 横張 誠



今村 これは僕自身の問題意識なんです、僕はかなり前から持続ける初期社会主義に強い関心を持ち始めました。それは、日本の状況にまったく無関係で、とりあえず日本のコンテラストで考えますと、アルクスリエのコンテラスト以降のイメジが非常に強くて、初期社会主義という言葉自体が逆算方式でつくられた概念規定なんです。とりわけ「空想から科学へ」というテラスタが、よしあはし別として非常に全世界的に流布し、それがひとつの権威をもち、便利でもあるところ。そこでテラスタアングクにもなってしまった。そこから、アルクスリエンテラスタは科学的であつてそれ以前はエトピアだとか、アルクスが本来の社会主義で、それ以前は初期のものである。というふうな考え方が自明のごとく、一九世紀後半以降、第二インテラ、第三インテラを通じて現在まで来ている。そういう命名法自体を、ひとつ解体しておかないといけないのではないかと感ずるんです。

一九世紀の前半期は初期ですから、アルクスリエンテラ以外にも、幾多の可能性をもつた人が活躍していたし、いまだに未決の問題も含めて、多くの論点が非常に真面目に提案されたと思ふんですね。そういう視線への方向転換を、そろそろやるべきだろうと思つてゐるんです。

日本で、そういう問題意識からの研究がなつたかという点、僕は少なくとも一つはあつたと思つていて、それは良知さんのお仕事です。良知さんの「アルクスと批判者群像」のなかに印象的冒書があるんです。それは、アルクス以外にも、近代社会の批判者はいつていられるけれども、そういう人たちは、先ほだ言いましたようなかたちで無視されたり忘れ去られたりしている。それを救わねばならない。そういう努力がいまや必要なんだという意味のことなんです。

ですから、まういふかどうかはわかりませんが、この慶義会が、初期社会主義という冒書自体を消すような方向をもち、新しいイメジをそこに組み込むことに貢献できればいいなと思つてゐるんです。

加藤 私が一九世紀の社会主義の歴史の中で、だつたことがあるのは「社会主義と組織原理」(慶社)という本くらいなんです。僕自身の「おとがき」で、いま社会主義が冒されたのだよ、似たようなこと、つまり、おとがきという冒書外のことを取り上げたい。良知さんの「アルクスと批判者群像」を、



のはシルベルマンの「フランスチル社会
 学辞典」にもちゃんと出ている単語で、フ
 ランスチルが実現する前の時代をフリーエ
 はこう呼んでいるのです。しかもポトリー
 ルはこの「レ・ラング」という詩集を「一八
 四九年の二月四日」つまり、共和政言の
 一周年記念日に刊行すると広告を出していま
 す。それから、アナロシ（羅達とコリスボ
 シュクス）という彼の詩学の中心的
 な概念についてですが、コリスボシュクスは

ヌエチンホルクだけれども、アナロジ
 ーエからきているとも言っているんです。
 さらにポトリーエなども言っているんです。
 ミクロに調べていきますと非常に微妙なこ
 がわつてきます。たとえばポトリーエ三世
 とタイクトル・エギーを体制と反体制のポ
 ルとする簡単な図式を考へて、そのなかにポ
 トリーエとポトリーエの関係を描いてみる
 と、ポトリーエがこの両極に非常に複雑に
 かかわっていたことが見てくるのです。そ
 ういふこともあつて、突き詰めていけば、社
 会思想というものと近代のポエジーないし美
 学というものがお互いに補充しあつてい
 る。補充の仕方が多少わかってくるのではな
 いかという気がしているんです。それで私も
 いわゆる初期社会主義というものに目を向け
 てみたいと思つているところです。
 そこで、先ほど加藤さんが言われた「社会
 主義の周縁の責任はどこにあるのか」という問
 題についてですが、ひとつには芸術とかポエ
 シーとかというものが担つていた部分で、社
 会主義がとり込めなかつたということではな
 いかと思つてます。ポトリーエとポトリー
 ルの関係にしても、ポトリーエはポトリー
 ンにかなり関心をよせているのに、ポトリー
 ンのほうにはポトリーエについての記述は

のか。私としては、ポトリーエがそれにと
 ういふふうにかかわつたかということを含め
 て、そういう問題意識をもつています。
 今村 たしかにポトリーエはサン・シモン
 だけではないで、フリーエとか、あるいはバ
 リの「憂鬱」などを見るとポトリーエと出会
 うたというふうなことがあつて、フリーエと
 てしましますね。

芸術をめぐる異議と矛盾

今村 サン・シモン主義運動というのは、先
 ほど加藤さんが言われたように、のちのノ運
 の問題で言うと、諸思想の根源のルーツもある
 んですが……
 加藤 どにでも行くんですよ。(笑) 社会だ
 つてコトですから。サン・シモン主義とい
 うことになつてしまつて、
 今村 サン・シモン主義運動というのは、一
 九二〇年代から三〇年代のなかだ十年の運
 動なんです。非常に短いわけですが、ところ
 が、フランスだけではなくてドイツなどでも
 かなりインパクトがあつた。これは、社会意
 想の面も経済思想の面もあるんですが、僕が
 少し強調しておきたいのは、芸術家に対する
 インパクトがものすごく大きかつたというこ
 となんです。この影響というのば、もちろん

ある一角をとれば芸術運動であつたという側
 面があるわけですが、それにポトリーエなど
 をくつつけていくと、かなり大きな問題があ
 ります。グーテなどともあたりにひつかか
 るとすると、初期社会主義などというイメー
 ジが吹き飛ぶほど、芸術家を罵りそれを内
 面からドライブしていくような側面を非常に
 もつていたというところを、やはり一方で知っ
 ておかねばならないと思つてます。
 権張 芸術の有用性をなんらかのちたてで訴
 えかけたということ、これは、芸術家にとって非常
 に嬉しいことだつたのでしようけれども、そ
 の有用性に早いうちから疑問を投げかけた者
 たちがいたのも、事実ですね。ポトリーエ
 がそうですが、のちに社会主義者リアリスムが
 出現して、欺瞞性がはつきりしてくる。その
 欺瞞性を早いうちに予知したのがチカタンと
 か呪われた詩人とか呼ばれた人たちがたつと
 思ひます。
 サン・シモン主義は芸術家にとって大変な
 インパクトだつたわけですが、そのインパ
 クトをはね返すくらい自信と愛着をもつて
 いた人たちがいた。その二つがどういふよう
 にはまり合ふのかというのが、この問題のか
 なり大きな部分だつたと思ひます。
 今村 そうですね。ポトリーエはほんとに

ないようです。
 また、先ほどサン・シモンの責任というこ
 とを言われましたけれど、一八三三年に、ピ
 エール・ルルーが「個人主義と社会主義につ
 いて」という論文を書いて強権的だとして植
 玉に挙げているのがサン・シモン主義です。
 ルルーは、フランス語でリアリスムという
 語を初めてもちいたのは自分だとして驕
 ですが、組織の下に自由と自発性をすべて葬
 つてしまつて、傾向をこの時点でリアリスム
 と呼んでいるわけですが、実は主にサン・シモン
 の活動を指しています。
 それに五月革命の時の用語で言えば、社会
 主義というものがレキエムベシカ、レキエ
 ム・シオンが行なわれるという過程があつた
 わけです。ルイ・ナポレオンはナポレオン三
 世になる以前の四年に「貧窮の絶滅」とい
 う本を書いています。そこに見られる立場
 は完全に社会主義です。ポトリーエは
 という単語も使つていて、下地になつてい
 るのはサン・シモン主義です。
 すでに二月革命以前に、社会主義が含んで
 いるあやしいもの、危ないものが、い
 るるなかなから出てきて、批判され
 ている。そして四年以後、それがポエジ
 ーなり美学なりにどういふふうに出てくる

橋を社会運動のためのプロパガンダとして扱
ました。サン・シモン主義も宗教運動が絡
んで複雑なんです。結論的にはやはり
「問題」をどう扱うか、つまり、音楽を通じてサ
ン・シモン主義運動をプロパガンダしよう
とガナナイは考えていた。最初は、宗教
色がややましいので、そういう人たちが動ま
る色ややましいので、だからだんだん離れるわ
れを受けたい。二〇世紀における社会主義
は、リアリズム論とおっしゃいましたが、結局あ
るのと同じに、励ましと反発という、社会主義と
の間に、原型的な問題が出てきている。
加藤 ドイツでも、ヴァイトリンクが義人同
盟の活動でパリを開放されてスイスに行つて
やり始めるのが、合唱の会なんです。ある
いは、料理教室をやるといふ調子で組織をつ
つていくんです。のちのドイツでは、コミ
ュニズム系というよりはむしろ社会民主主義
系で、労働者のための図書館をつつたり、
夜間教室を開いたり、労働者教育協会をつ
つたり、旅行空やスホーツ、サークルを組織
したりというふうにつなげていくんです。
その際、政治的に組織するために歌や料理の
会をやつたのかどうかはよくわからない。そ
う解釈できる部分というのは、もちろんある。
しかし、ヴァイトリンクを彼の周りでそう

いう運動を行っていた人たちは、それ自身の
なかにやはり喜びも見出していただろうと思
うんです。
マルクス主義の系譜は、それをいれれば政治
運動に純化していくようなところがあります。
それが四八年革命以前の社会主義思想のなか
には、むしろいろいろな方向に分化していく
可能性がありえたとおもうんです。そこで矛盾
が解決され緊張関係が解かれるという関係で
はなくて、緊張関係とか矛盾が存在しつづけ
ていると、このことを、のちの思想がどのくら
い突き詰めてきたのかという問題があるの
ではないでしょうか。
今村 そうですね。消してはいけなくて、む
しろ持続すべきだった。やはり、そういう際
間はあったわけですね。非常に活気があつた。
それがルリチンになるとみんな反発する。
ただ、なぜサン・シモンにあんなに励まし
れたのか。たとえばフーリエなどは、著作自
体が音楽の用語でぜんぶ書かれているわけ
ですから、音楽家はむしろあつちに行つたほう
が自然な感じがします。サン・シモンのよう
な、一方で産業主義で、国民を一つの工場に
仕立てあげてインテリ技術者たちがバンバン
ひっぱっていくというふうなものに励まされ
るといふのは、僕にはほとんど逆説めいてお



▲今村 河原

でその荒唐無稽さを批判し、それを補うよう
なものをもつてくるというのはそうとう難し
かつたと思います。それを埋めるものとして、
芸術とか詩とかいうものが、もちろん組織論
としてはないけれども、そのあたりに染み
込ませようとしたかたちで、なんらかの役割を果た
したのではないかとおもうんです。
今村 たしかに社会主義と言つても、創始者
たちの個性が反映して、いろいろなものがあ
りますね。いま横張さんが言われた組織論の
作用しているだろうと思ひます。
そのことをもつと広く言つと、先ほどデザ
インという言葉を使われましたけど、人と人
との関係をどうデザインするかということだ
と思ひます。ですから僕は、そこにデザイン
という言葉を置いても同じだと思
ひますね。
分はデザインだと思ひていた。あの人は
提案キチでしよう？ フランス革命の時代か
らもうどうと人、リヨンの都市改造計画を出
したり、ナポレオンに会わせるとか言つてね。
俺の美でいけば絶対うまくいくとか……。彼
の頭の中には、建築的思想というものが非常
にあつた。サン・シモンも一種の社会建築家
みたいなところがありますし、どうやってデ

橋を社会運動のためのプロパガンダとして扱
ました。サン・シモン主義も宗教運動が絡
んで複雑なんです。結論的にはやはり
「問題」をどう扱うか、つまり、音楽を通じてサ
ン・シモン主義運動をプロパガンダしよう
とガナナイは考えていた。最初は、宗教
色がややましいので、そういう人たちが動ま
る色ややましいので、だからだんだん離れるわ
れを受けたい。二〇世紀における社会主義
は、リアリズム論とおっしゃいましたが、結局あ
るのと同じに、励ましと反発という、社会主義と
の間に、原型的な問題が出てきている。
加藤 ドイツでも、ヴァイトリンクが義人同
盟の活動でパリを開放されてスイスに行つて
やり始めるのが、合唱の会なんです。ある
いは、料理教室をやるといふ調子で組織をつ
つていくんです。のちのドイツでは、コミ
ュニズム系というよりはむしろ社会民主主義
系で、労働者のための図書館をつつたり、
夜間教室を開いたり、労働者教育協会をつ
つたり、旅行空やスホーツ、サークルを組織
したりというふうにつなげていくんです。
その際、政治的に組織するために歌や料理の
会をやつたのかどうかはよくわからない。そ
う解釈できる部分というのは、もちろんある。
しかし、ヴァイトリンクを彼の周りでそう

いう運動を行っていた人たちは、それ自身の
なかにやはり喜びも見出していただろうと思
うんです。
マルクス主義の系譜は、それをいれれば政治
運動に純化していくようなところがあります。
それが四八年革命以前の社会主義思想のなか
には、むしろいろいろな方向に分化していく
可能性がありえたとおもうんです。そこで矛盾
が解決され緊張関係が解かれるという関係で
はなくて、緊張関係とか矛盾が存在しつづけ
ていると、このことを、のちの思想がどのくら
い突き詰めてきたのかという問題があるの
ではないでしょうか。
今村 そうですね。消してはいけなくて、む
しろ持続すべきだった。やはり、そういう際
間はあったわけですね。非常に活気があつた。
それがルリチンになるとみんな反発する。
ただ、なぜサン・シモンにあんなに励まし
れたのか。たとえばフーリエなどは、著作自
体が音楽の用語でぜんぶ書かれているわけ
ですから、音楽家はむしろあつちに行つたほう
が自然な感じがします。サン・シモンのよう
な、一方で産業主義で、国民を一つの工場に
仕立てあげてインテリ技術者たちがバンバン
ひっぱっていくというふうなものに励まされ
るといふのは、僕にはほとんど逆説めいてお

問題で言うと、なぜフランスでルリチン主
義があれだけ強かつたのかというと、逆に言
えば、組織の縛りかきききききききききき
ころがあつたと思ひます。あれは儀式主義
というのではなくて、みんな比較的ルリチンに
参加して、言いたいことを自由に言ひながら
団結ができるということ、パリ、コミュニ
ンまで頑張つてやつていけたわけですね。組
織に対するイメジというか関わり方という
のは、やはり社会主義イメジにもものすごく
作用しているだろうと思ひます。
そのことをもつと広く言つと、先ほどデザ
インという言葉を使われましたけど、人と人
との関係をどうデザインするかということだ
と思ひます。ですから僕は、そこにデザイン
という言葉を置いても同じだと思
ひますね。
分はデザインだと思ひていた。あの人は
提案キチでしよう？ フランス革命の時代か
らもうどうと人、リヨンの都市改造計画を出
したり、ナポレオンに会わせるとか言つてね。
俺の美でいけば絶対うまくいくとか……。彼
の頭の中には、建築的思想というものが非常
にあつた。サン・シモンも一種の社会建築家
みたいなところがありますし、どうやってデ

かしと思ひます。……
いまから見るとかえつて少数派で影響力の
少ないアリエなどのほうが、たとえは
芸術との関係などを、利用主義ではなくて、
人々の精神と身体のひだにしみこむようなか
たちで思想を構築して、逆に光り輝いて
くるとも言えるわけですね。ペンヤンなどが
言葉に言えないような非極現象を引き起こし
ているのも、おそらくそういうところなのだ
らうと思ひますね。
ルリチンを組織論の消滅
加藤 いろいろ見てくると改めて組織論とい
うものを問題にしなればならぬように思
ひます。組織というものがあまりに重きを置
きすぎる立場に対して、非常に早うちに批判が
出た。ところがその延長上で、組織論そのも
のが抜け落ちていく傾向が生じたような気
がします。後の社会主義思想はたえはフー
リエの組織論は真面目に相手にしない。フー
リエは荒唐無稽ですけれども、非常に情熱を
かけて、たいへん綿密な組織論を作り上げて
いるわけですね。
加藤 あれはデザインですね。
加藤 フーリエの場合は、現在もその組織論
というのが非常に魅力的で、文字的に読める

グアンしていくかということのいくつかのバ

グアンだとも考えられますよな。

一方でフリー五風の、いわば理想社会

のグアンみたいなものがあり、他方でいま

言われたアルトドからグアンキス文公なりサ

ンナイカリスムに流れる流れがあるわけだ

ね。そしてそれと同時代にグアンキが出てく

る。私はブルグスの共産主義者同盟というのは

組織論のレベルで言えばグアンキ的な系譜だ

と思うんです。グアンキの場合には、自己の

革命結社のグアンキは非常に厳格なんですけ

れども、そのあとにどういう社会を創るか

というほうは、あまりはつきりしない。そこに

フリーエを媒介すれば面白いでしょうけれ

ども。とにかく権力をとってしまえばいいん

だという話になっている。そういうものが、

多量に初期社会主義と括弧付きで括ったも

のなかには、共存しています。

今村 アルトド主義とグアンキ主義はぜん

ぜん違います。けれども実際には仲良くやっ

ているんです。あのセンシビリティというの

は、いまから思うとものすごく貴重だと思

いますね。普通だったらセクト争いで険悪に

なるのに、それが非常に仲良くやって、すっ

と続くわけでしょう。

加藤 組織論とかオーブンの運動ということ

で言いますと、どちらかというと、サンシ

モン派からグアンキのサンナイカリスムなど

に流れていく流れよりは、オーウェンからチ

ヤチスム、そしてイギリス労働運動、協同

組合運動等々に流れていく流れを見るべき

のがあると思います。そこにはもうひとつ、

と続くわけでしょう。

加藤 組織論とかオーブンの運動ということ

で言いますと、どちらかというと、サンシ

モン派からグアンキのサンナイカリスムなど

に流れていく流れよりは、オーウェンからチ

ヤチスム、そしてイギリス労働運動、協同

組合運動等々に流れていく流れを見るべき

のがあると思います。そこにはもうひとつ、

フランスとの緊密関係がどういうものだった

かという問題がありそうな気がしているん

ですが、少なくともエーハモニーのつくり

方とか、そのあとのチャーチスムの運動体

あり方を見ますと、私には非常に外部に開放

された運動体というイメージがあるんです。

私は「社会主義と組織原理」という英訳

命前に書いた本で、グアンキ型とオーウェン

型というふうに対置してみたんです。グアン

キの四季協会とオーウェンのエーハモニー

一を両極としてその間にいろいろなスタイル

が存在していたというかたちで、大雑把に言

えば括れるのではないか。逆に言えば、外部

に対して極度に閉鎖的な秘密結社というイメ

ージと、エーハモニーのように出入り自

由の小共同体、つまり、その小共同体自身が

運動体でありかつ出入り自由な一つの社会で

あるというイメージとか、社会運動として見

るとどうイメージとか、先ほども言ったように、アルト

ド今村ただ、そのグアンキ主義のイメージ

ジでとらえています。

組織でずっとつながっていったというイメ

ジでとらえています。

グアンキと仲良くやっていけるのがグアンキ

グアンキです。ですから、そういうよう

に流れていったのは、グアンキ主義の組織論

についてのドイツ型の理解の流れなのではな

いか。つまり、グアンキストのほうは、組織

はたしかに秘密結社型なんだけれども、そこ

にいた人間群像というのは案外セクト主義が

ゼロであって、けっこう融通がきくような態

性をもっていたのではないかと思っ

それが東欧に行きロシアに從って、グ

アンキ主義の一種の解釈で、そういうイ

思きたということも充分に考えられます。

加藤 パリに亡命していただいた人たちが盛

んだグアンキ主義ということになるわけ

な(笑)

今村 そう、そう思い込んでね。暗い、暗い、

本当の意味で秘密結社の、鉄の規律の、とい

うふうに流れていった系譜というふうな...

ですからグアンキ自身が、のちにレーニン主

義につながるようなものを、本当に思想的体

質としてもつていただかどうかは検討に値しま

すよな。

横張 晩年のグアンキの「天体による永遠

などを見ますと、フリーエの引力を思わせる、

非常に荒唐無稽なところがありますね。です

から、そのあたりにきこえなくなりがり

市場の中のグアンキズム

あるんでしようね。だからもう少し組織論的

なところに入ってくれたらよさそうなものな

のに、入りそこなってしまうている。あのへ

んのところで頑張ってほしかった(笑)

横張 サン・シモン派に近づきながら、組織

について行けなくささと辞めてしまった

者の中にサントローヴがいます。背中で

ホグスをかける変な服を着て、新興宗教的な

異様なことをやるわけで、これについていく

のは難しい。社会思想家・活動家たちのそう

いう卑俗にはなじめないという人が出てく

る。それに対して貴族主義的な態度で騒む者

が出て来るわけですが、それは従来、反動

だというところで切られてきました。

たとえば、ポトドールは非常に貴族趣味

だと言われます。グアンキの概念をまきし

くこの線上にあるものです。

彼には「貧乏人を殴り倒そう」という散

文詩があつて、アルトドへのオーウェンシユに

なっているのですが、他方で「ポトドールは

ものを殺す場合でさえもグアンキではない、

それは許さない」ともポトドールは言つて

います。要するに、ポトドールはアルト

ドの経済の足方には敬意を表すけれども、そ

うキリスト教というローマ主義の神がでるわ

けです。

キリスト教というローマ主義の神がでるわ

けです。

キリスト教というローマ主義の神がでるわ

けです。

キリスト教というローマ主義の神がでるわ

けです。

キリスト教というローマ主義の神がでるわ

けです。

キリスト教というローマ主義の神がでるわ

けです。

キリスト教というローマ主義の神がでるわ

けです。

キリスト教というローマ主義の神がでるわ

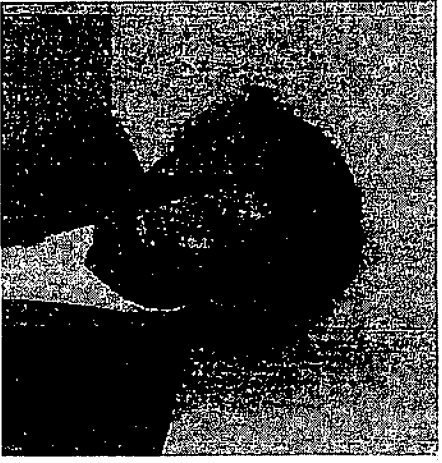
けです。

キリスト教というローマ主義の神がでるわ

けです。

キリスト教というローマ主義の神がでるわ

けです。



▲原野 賢良

では、キリスト教の時代といひはいつか
らかという中世、つまり古代世界の崩壊
以後といふことになる。そうすると、モター
ンという時代はキリスト教以降、中世以降と
いふことになり、ほとんどモターンの中世と
いふ等式ができて、時間がねじれてしまいま
す。ローマ主義の前の古典主義の時代より、
中世の方がモターンといふことになる。そう
いふ観念は歴史観を、サイクトル・エギーが同
じ図で受け継ぎます。エギーは、古代と現
代の前に原始時代をつけ加えるだけです。ね
じれたままなのです。エギーはそれを、一
八二七年発表の戯曲「クローマエル」の序文
「ローマ主義の二エフエストと書かれて
いるものですが」に書いています。
ポードルがモターンという形容詞のか
わりにモターンという各詞をもち込んで、
そのねじれた時間を整理したのが、一八六三
年の「現代生活の画家」です。おしを解消
するのに、五十年くらいかかっている。その
ときになって初めて、「現代を描く」というこ
とが文字通り現代を描くことになつたわけ
です。
他方ブルジョア観の点でもモターニは反
ローマ主義です。すなわちロン派の反ブル
ジョアの立場に対して反・反ブルジョアを唱

えるのです。ポードルは、その最初の美術
批評「一八四五年のサロン」の冒頭で、絵を
理解してゆくなら、ブルジョアはど無稽
な連中ではない、そもそも絵を描いている人
はブルジョアに買ってもらつたために描いてい
るわけ、結果的にともそうなつて、自分
がどういふサロンに評を奮っているの、ブル
ジョアが読んでくれるからだと思つて、ロー
マ主義の反ブルジョアの立場を否定します。
そういう市場原理をきちんととらえているわ
けですね。
それ以前ももちろんそんな事情はわかっ
ていたわけで、ロン派も後をめたさを感じな
がら、反ブルジョアの立場をとつてきたわけ
です。そもそもロン派の連中というのは、
ほとんどブルジョア出身だった。ブルジョア
には美がわからなにか言いながら、自分
たちもブルジョアだったブルジョア自身が、
低俗とか卑俗という意味でブルジョアという
言葉をも批判的に使つてしまつた。以上
上、ブルジョアという言葉はもうほとんど意
味がない、だからそんな態度はやめようでは
ないかというの、一八四五年のサロンの
冒頭の主張です。翌年の「一八四六年のサロ
ン」はもっと徹底して、「ブルジョア」とい
う序文をつけて、そのテクニクはまぎしくア

ないというのには女性にけなげない表現なんです
ブルジョアはそういう生産・消費過程という
ものをきちんと把握していない面があるとい
うように読み取っていらっしゃるんです。
今村なるほど、面白いですね。
加藤「ブルジョアは一般に初期社会主義のな
かではちいば個人主義的で、今日の貧窮
で言えは全体主義にちいば遠いといふこと
になつていきますよ。自主管理にはつながる
けれども、ノ運命にはつなげないといふ脈
絡で再評価されているわけですね。
初期社会主義のなかでは、カペーの「イカ
ア共和国も全体主義モターンだとされてしま
して、食卓とか服装につけて機械的に平等化し
ている」と言われます。ところが彼は、こうい
う言ひ方をしているんです。
「すべての人が同じ服装をしている。このた
め嫉妬とかおしやれの余地はない。しかしこ
の国の均一性にはまったく変化がないといふ
ふうには決して考えないでほしい。性によつ
て服装が異なる。それぞれ別の性の個人
が、年齢と状態に応じてしばしば服装を変え
る。幼年と少年、未成年と成年、御身と既
婚、やめと再婚、さまざまな職業、さまざま
また労働、これらはすべて服装によつて明示
され、同じ状態の個人はすべて同じ制服を身

につけている」と。これは通常の理解では、
まさに制服化された一化され、平等主義に全
体主義といふ文脈につながる、社会主義思想
といふのはそもそもそういうものなのだとい
う筋で見られるわけですね。しかしここで注意
したいのは、「この国の均一性にはまったく変
化がない」といふふうには決して考えないでほ
しい」と断らなければならなかつたといふ
ことですね。
食卓についても同様に、「すべての人が最
も粗末な食べ物から最もおいしいものと評価
されるものまで、区別なくすべての食物を平
等の取り分け手にする」。しかし「毎朝同じ
ものを食べる」といふふうには考えないでほ
しいと弁明するわけですね。「食糧委員会は、食卓
の回数、時刻、長さを決定するけれども、一
週間の食事はそれぞれバラエティをもたせ、
番師と月によつては違ってはならず、日によつ
ても絶えず料理に変化をもたせる」とわざわざ
断る。
社会主義思想が平等主義を基点に置きます
と、どうしても全体のなかに個が吸収されて
いく。画一化とか均一化に流れていって、そ
れが財産共有制になると理解されていきます
し、現にそういうかたちで進んできたんです
が、しかし当時の社会主義者たちはそこで弁

明しななければならないなかつた。そのことが、概
張さんのポードルの話とどういふように
リンクするのかわかりませんが、そういう
負目みたいなものを、のちの社会主義思想
はいつたにどれくらい抱いてきたのかと
いふ問題が、どうもあるような気がするん
です。
芸術家とか音楽家とか詩人が入りこめない
のは、まさにその世界なわけですね。少な
くとも初期社会主義はそういう負目をもつ
てきたし、そのあたりを弁明させるをえない
歴史のコンテクストと、それを説明するロジ
ックをそれなりにもつていた。今日のノリや
東欧の文脈を認んでみますと、社会主義に平
等主義に画一主義に全体主義と、すべて等号
でくられていくわけですが、そういうふう
に流れないかたちで社会主義あるいは社会
思想の組む方がありえただけはないかと思
いますね。
今村「趣味とかテクニクの問題は、もう一八
世紀以来、カンとパルクがやっているとわ
けですね。これは、他人にはそのまま伝えられ
ない、個人そのものの問題であり、個人
自由の問題とも関わると思ふんですが、その
いふものが当時の文化圏では非常に異質な
たと思ふんです。先ほどの社会主義者リッ

ブルジョアに向けたものだと書いています。さら
に、この二つのサロン評の末尾では、「現代生
活の英雄性」といふ表現をもちいて、現代を
描くといふことに価値を見出します。
初期のサロン評の冒頭と末尾で遠くわかれ
わかれに表現されていた反・反ブルジョアの
立場と現代の美の承認とが、後に一緒になつ
て、ポードルの中でモターニが成立す
るのです。モターニとは、したがって、現
代といふものを、ブルジョア社会の現実の碎
組の中に直視する態度であつて、そうした態
度をとる詩人・芸術家がダンテといふわけ
です。風俗やモターンへの接近を通じて、資本
主義の生産・消費過程にひたり込みながらそ
れを直視する人物といふことですね。
ベンヤミンは、「歴史の層」といふ言ひ方を
して、歴史の層を自認していますが、その
ベンヤミンが、ポードルにあっては、肩
屋は詩人のメタフィラだと自認しています。つ
まり詩人が詩の題材を求めて都市を遊歩する
のは、肩屋が肩を集めてそれを選別するのと
同じだと言つています。詩人リッタンに肩屋
という等式が成り立つのです。モターニとは
は、従来の詩や美学が肩扱ひしていたものを
拾ひ上げることだとも言えます。
そうしますと「ブルジョアはダンテでは

もう一度見てみる必要があると思います。横張 ルー主義の、人間関係の透明性の問題ですが、透明性を前提にするから、透明でないものを嫌して行くわけですね。それがシヤコビニ公にまでつなげていく。ビエール・ルルは、社会主義と個人主義を論ずる論文のなかで、そのところを非常に厳しく批判していますね。恐らくアルドは反ルー主義という面で、そういうところを愛されています。それから、先ほど話に出たアルドの主義者とフランキストが、内ゲバを起さずどうまく噛みあつていたという状況の話ですが、ルー主義の思想がうまく入り込んでいるんでしようね。ルーエの場合、透明な人間社会というものは全然考えていません。ルーエは、直接的な関係が目ならいかに間接的にうまくやっていくかという考えの特長です。Aという人とBという人との間がうまく行かない場合には、Cという人を間に入れるという風に、必ず間に媒介を入れてうまくやっていくとする。だから、引力と欲望の分類をするだけで、あんなたいへんな組織が出来上がってしまうのです。ルーエは引力には間接的なものと直接的なものがあると言っています。たとえば天文

いる。その努力を僕は生かしたいと思ひます。横張 ルーエはAという人とBという人がすぐ仲が悪い場合、両者とも國運が好きだから國運を媒介にすればうまくやっていると、そういう話を庭々と繰り広げていくんですよ。(笑)それで少しばかりしつこくなつてくる。それにならしてトランスパラスという考えは非常にスタートです。一九世紀が次第にトランスパラスの方に流れていくのは、やはりそのスタートさだわ。今村 アルクスの場合は結局は理性の話になるんですね。無知で革命出来るが、なんでもことを論ずる。(笑)しかしルーエが展開するのは理性論ではなく情欲論ですからね。加藤 それで思ひ出しました。フリーエが男と女の関係について、一人の女性、一人の夫と、生産用男性と、衆人、何人かの占有権を持つことができると思ひますね。いはば一人の人格のなかにいろいろな情欲がオパーテラしてゐる。それらをすべて一元化していくという考えがその後には強まっています。くわけですが、しかし現実の生身の人間は、二〇世紀の合意ならおき、一人の人格のなかにいろいろな社会関係をオパーテラしていますね。

学者が、星が好きだから星を見るというのは、直接的な引力です。ところが博物学者が自然を研究するために大嫌いな蛇を飼つて研究しなくてはならないというのは、間接的な引力です。人と人との間に、いかに第三項を入れたいかというのが、ルーエの思想の根幹です。よ。今村 それは非常に大事な問題ですね。経済の方に話を持っていかせていただく、アルクスの透明主義は三乗化されていると思ひます。それは一つには、社会理想としてルーエに非常にフィットしてるところだし、それからもう一つには古典派経済学が透明主義のところからあります。経済学で媒介と縁のところから、古典派経済学と透明主義を論ずるところが、古典派経済学といふのは、貨幣が結局のところなくもいいうことは、貨幣が論議的になるんです。労働価値論というのは透明主義で、貨幣がなくとも実現できる。だからナチズムであれ、ロシア革命以後のロシアであれ、どうも人間関係が透明であるという思想が背後にチラチラしていると思ひます。これをどう克服できるか、これがからの問題ですね。媒介項を作るにしても、資本に任せておけばいいというようなものではないでしょうね、別の物をどう設定するか。ルーエが、愛の新世界のアンジェリカのようなものを一生懸命作つて苦勞して

これは政治学の方では、民主主義における参加のオパーテラ、重層的メジャーシップと言つて。つまり政治行動を規定する要因はこれだ、ということ、階級原理で説明したり、利益で説明したり、イデオロギイで説明したりというロジックはあるけれども、現実には人が政治行動をとるときには、それぞれの人格のなかである種の使い分けがされている。その使い分けがどのように行なわれるかを分析してきたのが、二〇世紀の政治学の一つの流れでした。いまふりかえてみると、いかにチモクラシー論が理性的・合理的な選択をする個人を前提に構成されているかがわかりますね。その理性的な選択の根拠はなにかということ、アルクス主義の政治理論はクラスという概念を出してきた。そこで政治理論は「科学」であり唯一正しい政治を構成するんだというタネエで裏切られてきた。けれどもアルド・ポリテイクスでは、ここまで社会関係が重層化し、情報とかカルチャーが媒介されるようになると行動の回路は無数に存在している。だからそれを整理する原理を出して、その原理でもって社会を構成しようという考えが自分で問題になっている。そういうことを初期社会主義者たちはある程度感じていて、だ

フエニエムへの視点

から透明性をいろいろと準備しているんです。今村 フリーエの場合はただ感づいただけではなくて、非常に方法的です。彼はシヤコビの描いた人間像は、複合してほとんど複雑になるほど人間の充実を増大するという思想ですから、彼の社会のデザイン自体が、複合性の増大という方法意識に貫かれていた。それに対してアルクスのやつたのはシヤコビへの還元、根拠を作つてきちんとやることですから、ルーエ的な考えと正面衝突したと思ひます。フエニエムへの視点 横張 初期のサン・シモン派のフエニエムの論争のなかにその問題があつたように、ペンヤミンの扱っているクレール・デニエムと他のフエニエムの論争というのは、男女関係の透明性の問題を中心にして議論が展開しているんです。男女関係を破壊さ、つまり透明性を基軸にして築き上げていくか、それとも秘密を保つていくのか、という議論です。クレール・デニエムとの関係は秘密を守つて関係を築き、つまり透明性を

顔が崩れる中

富山太佳夫

根柢しながら関係を作っていくことを主張するんですね。ところがクレール・チャールは「自願」してしまふ。彼女が自殺してしまふのは、次第に適性に傾いていく時代

「大ニ」シモン主義には、フエニエムが「ありましたね。」

「初期社会主義に光があつてきた背負はば、フエニエム運動・フエニエム研究

「初期社会主義を取り上げてきたということがありませぬ。」

「社会主義がフエニエムの要素をだんだんとおとってきたということでしょうか。アルトンは全然フエニエムではありませぬ。」

「アルトンは家父長制主義だからね。令村アルトンは家父長制主義者という横強アルトンは一月革命の頃を境にして、フエニエムの傾向のうすい運動が力を持つようになつたということですね。もちろん一月革命の頃にもフエニエムの運動はいろいろあつたんだけれど……。」

「加藤 先程はフエニエムの全体主義との関係で、フエニエムを消していかねければならぬとの関係でも、消していかねければならぬ。」

ない社会主義の運命がいろいろあるんでよ。これは社会民主主義ですが、「友愛」フエニエムは「男尊女卑」だからというので、最近女性も含みうる「運命」(リグリス)に「みかみか」たりしているように。

令村 フエニエムの横強を、熱心に議論した時期があつたんですよ。サン・シモン主義なんか新異宗教具にたれけれども、奇妙なことをやっています。

横強 フエニエムの場合は、冗談でも本気もつかないだけだけれども、老女と青年との関係について、記憶がたつきありません。当時のアルシヨフの結婚というのは、お爺さんが若い娘をもらうというものでしたから、それへのアンチ・テーゼとしてやつたんですね。

令村 徹底した風刺をやっているんだ。天使結合というのもありましたね。

横強 そこから発展して、これも路線としか思えないだけだけれども、フエニエムは寝取られ男を大笑させた問題にしています。(笑) 寝取られ男の語にまでもつていくのは、フエニエムからない。よくわからなければ、面白い展開をしますね。

令村 フエニエムの考えていたのは、裏返された意味での普遍的究極制でしょう。そういう



ものを想定することによって、新しい人間関係の展望を闊別みかみか出していることとした。

女性解放論ですね。

横強 その後の女性解放運動で、怪しげな

「いかがおしい女性たちがなつていたという

ことも伝えられていますね。二月革命前後に

は、ヴェスナイエ派といふ名前の女性解放グループがあつた。ヴェスナイエ派の女性

というのですから、噴火するように活動する

ということでしょうか。半ば完結編まがいの

女性たちだつたという記述があります。

令村 それは社会主義のどのグループとつながりがあつたんですよか。

横強 それはちよつとわからない。

令村 フエニエム派だつたりして。(笑)

加藤 こう考えてみると、器としてはフエニエムが一番大きいですね。フエニエム主義というのは、本質的に体制に入りこめないで、怪しげなところを活動しているから、反ヴェスナイエ運動を何でも取り込めるところがある。もちよつともフエニエムが一番面白いから、フエニエム主義一本で行こうとするので、これもまた問題になりますけどね。

「いまからひとし、思想史

「(おとつろ、政治学

「(まじりまじり、フランス文)